



# 井筒俊彦の 『老子』理解を 分解する

—シャマニズム・聖人・渾沌

京都大学人文科学研究所

古勝隆一

# 問題の所在

- 井筒俊彦は、「東洋哲学」の一環としての老荘思想（道家思想）を重視した。
- 『スーフィズムと老荘思想』（英文原著は1966-67）、『老子』の英訳（1970年代の仕事）はその専著である。
- 『東洋哲学の構造』に収められたエラノス論文（1967-82）、『意識と本質』（1980年）、『意味の深みへ』（1985年）などの著作もあり。
- 井筒の老荘思想理解の特徴は、老荘思想をシャマニズムとの関連においてとらえようとする姿勢。
- 井筒はこの観点をどのように導入し、どのように展開したのか。

# 問題の所在

- また、井筒の見解は、エラノス論文「老荘思想における絶対的なものと完全な人間」（1967年の講演）に、老荘の「聖人」観についての見解が展開されている。ここにもシャマニズムとの接続が見える。
- さらに、井筒は好んで「渾沌」（『莊子』の語）を語るが、これもシャマニズムとの関連において捉えられている。
- 今回の研究報告では、シャマニズム・聖人・渾沌を手がかりとして、井筒の老荘理解の一端を明らかにしたい。

# 比較神秘主義 (COMPARATIVE PHILOSOPHY AND MYSTICISM) の試み

この書【引用者：『スーフィズムと老荘思想』】全体に通底する主要動機は、比較哲学と比較神秘主義の領域に新たな眺望を披きたいということだ。二つの世界観が絶対者と「完全人間」を基軸とするのは、比較にちょうどよい出発点となる。いずれの場合でもこの二つの軸を中心に存在論的思想体系全体が展開する。

存在論的構造として見るならば、このことはスーフィズムや老荘思想に限られないと注記せねばならない。絶対者と完全人間が世界観の二軸としてさまざまな対を成す構造は、世界中のさまざまな場所や時代に展開した、多様な神秘主義に共通する基本的パターンである。

(『スーフィズムと老荘思想』上、慶應義塾大学出版会、2019年、pp.5-6)

# シャマニズムをめぐって —マスペロと井筒

- なぜ、老荘思想がその比較の一方の材料に選ばれたのか？
- 井筒は中国古代のシャマニズムの一典型を『楚辞』に認めており、さらに『楚辞』と老荘とが同じ背景を共有するものであったと考えていたようである。
- 詩人の屈原を代表とする『楚辞』の思想が、『老子』『莊子』の思想と共通の精神的背景—シャマニズム—を持つ、という考え方。

# シャマニズムをめぐって — マスペロと井筒

前に述べられた『楚辞』と老子の書、荘子の書を較べることで、今度は、シャマニズムと道家哲学との連関のうち主観的で認識論的側面を露わにすることができよう。

かつてアンリ・マスペロが指摘したように【原注：上掲書、第三巻。引用者：Henri Maspero, *Le Taoism*, 1950のこと】、楚の国の偉大なシャーマン詩人、屈原と道家の哲学者を対象に比較研究すると興味深い結論が得られる可能性がある。

その発想を十分に展開する前に彼が亡くなったのは惜しまれる。

(井筒『スーフィズムと老荘思想』下、p.23)

# マスペロ『道教』に見える老荘思想

この時代【引用者：老子や荘子の時代】からすでに、不死の探究は道家的な宗教において中心的な地位を占めている。

「道を得た」道士、「真人」、ましてや「聖人」といわれる人々などは、みな永生者である。不死という観念は、まったく基本的なものであって、荘子は、かれの体系のなかで、不死の探究を二義的なものとしてしか認めないにもかかわらず、その荘子でさえ、長生は聖人に自然にそなわった属性の一つだということを、忘れることができないほどであった。

(アンリ・マスペロ『道教』、pp.177-178)

# マスペロ 『道教』 に見える老荘思想

このような「上帝の国」に昇ることについては、前四世記の楚の国の大貴族で、道教徒になった屈原の、神秘主義的な二つの詩、「離騷」と「遠遊」によっても知ることができる。……。

とにかくそれは、この旅の叙述というよりも、むしろ永生者たちのいる天国への昇天という外見をとった、神秘的合一の象徴的な記述であって、この昇天ということは、もっと洗練されていないサークルの人々が想像していたものである。

(アンリ・マスペロ 『道教』、pp. 177-178)



# マスペロ 『道教』 に見える老荘思想

古代中国において、個人的な宗教感情が自己を表現しようとする長い努力は、西洋における努力と同じ場合がかなり多かった。

神的なもの【原注：超越的なもの】を直接とらえようとして、同じ経験がなされた。道家の神秘主義者は、キリスト教や回教の神秘主義者とほとんど異ならない。

ただ、同じ経験について、かれらが述べる説明にちがいがあにすぎないのである。

(アンリ・マスペロ 『道教』、 p.192)

# 『スーフイズムと老荘思想』のシャマニズム理解

老子と荘子といった道家の世界観は、このシャーマンの思考様式を哲学的に練り上げた、いわば哲学的な頂点に当たると私は考える。

恍惚状態における絶対者との出会いと、その出会いから迸り出る原型的イマージュを通じて、感覚を超えた意識の地平でものを見る能力をもつひとが確かにいる、そうしたひとに特有の**個人的実存体験から展開する特殊な哲学**こそが老子と荘子の哲学であると、このことを言い換えることができよう。

(『スーフイズムと老荘思想』下、pp.20-21)

# 『スーフイズムと老荘思想』のシャマニズム理解

『道德経』や『莊子』を生み出した道家の哲学者たちの世界観の根柢にある経験に注視すれば、彼らはシャーマンである。

だが他方で、彼らは世俗的次元の原初的シャマニズムに飽き足らない知性的思想家でもある。

彼らが見るもともとのヴィジョンを〈在る〉の構造とみなし、その構造を説明するためにヴィジョンを形而上学的概念体系へと昇華させる、**そうした仕方で彼らは知性を用いる。**

(『スーフイズムと老荘思想』下、pp.20-21)

# 『スーフイズムと老荘思想』のシャーマニズム理解

道家の形而上学とシャーマンの世界観が本質的にも歴史的にも密に関連すると思える別の事実が、戦国時代以降の道家史に見える。……。

道家の形而上学的構造を外から眺めれば、シャーマニズムを基盤とした痕跡はほとんど見当たらない。

だが、例えば老子が〈道〉を哲学的に描写するとき、何か奇妙なもの、不思議なものが、そこにあることは否めない。

もともと道家の有した、シャーマニズムとの繋がりをそのことが示すように思われる。

(『スーフイズムと老荘思想』下、p.23)

## 『意識と本質』より

今ここで問題としている**表層意識から深層意識への推移**を最も原初的な、そして最も明瞭な形で示すものといえ、恐らくシャマニズムにおいて他にはないだろう。

なぜなら、シャマニズムにおいては、日常的意識とシャマン的意識とが、多くの場合、実に截然と分離しているからである。

古代中国のシャマニズム文学の最高峰をなす『楚辞』を例として、そのことを少し考察してみよう。

(『井筒俊彦全集』第6巻、p.181)

## 『意識と本質』より

超現実的ヴィジョンに哲学的意義を認め、シャマン的神話を象徴的寓話にまで変成させ、そこに存在論的、形而上学的思想を織りこんでいくためには、第三段階のシャマン意識をさらに越えた**哲学的知性の第二次的操作**が要る。

古代中国の思想界では、荘子の哲学が、いま言ったような意味で、シャマニズムの地盤から出発し、シャマニズムを越えた人の思想だ、と私は思う。

(『井筒俊彦全集』第6巻、p.181)

# 『意識と本質』における 『楚辞』と老荘思想の接合

- 日常的意識と非日常的意識とを区別し、そのあいだを行き来できる人を井筒は設定し、それをシャマニズムに求めており、『楚辞』のシャマンのみならず、道家の思想家もその精神を受け継ぎつつも、それを乗り越えたと見立てているようである。
- ここに、井筒におけるシャマニズムと老荘との接合が見られる。
- 「聖人」「真人」は、シャマンや道家の思想家たちとどのような関係にあるのか、井筒は語らないが、「日常的意識／非日常的意識」を行き来する存在として、道家の思想家たちが、「聖人」「真人」という理想を描いたものと、井筒は考えたのではないかと考えておきたい。
- しかし、「聖人」「真人」が、道家の思想家たちの実践とどのような関係にあるのかは、『老子』『莊子』においては不明瞭と言わなければならず、さらなる研究が必要。

# 「渾沌」 (『莊子』の語) をめぐって

渾沌の概念あるいはイマージュは、シャマニズムに起源をもっている、と私は確信しています。

その歴史的な起源では、渾沌は一群のシャマニズム神話に属しています。

『山海経』という書は、顔に識別できる特徴をもたない奇妙な怪鳥とかたちで、山や海に住むと考えられる神話的な怪物、「渾敦」のことを詳しく記しています。

(「老莊思想における絶対的なものと完全な人間」、『東洋哲学の構造』、pp.30-31。  
もと1967年のエラノス講演)



# 「渾沌」をめぐって

水も漏らさぬかに思える〈在る〉の区切りを解体すること、それが荘子の最初の仕事になる。そうすれば太初の〈渾沌〉のもつ計り知れない深さを垣間見せることになるだろう。……

我々にもっとも理解しやすい方法は、おそらく、荘子による「夢」と「現実」を（境目をなくすことで）「渾沌化」しようとする試みであろう。もし「渾沌化」という言葉を使うことが許されるならばの話だが。

見かけ上、叙述的で物語風の極めて簡素な言葉をつかい、荘子は、「夢」と「現実」とが互いに区別されなくなり、両者が「定まった形がない」ものに溶け込む存在論的次元へと直接に我々を引き揚げようとする。……

このように厳然と異なり区別されるこれら二つのものが、人間意識の或る次元で区別されなくなり、未分化の状態〈渾沌〉の状態へ移りゆく。

（『スーフイズムと老荘思想』下、p.33）

## 『意識と本質』に見える「渾沌」

存在の真相は「渾敦」（渾沌）だ、と莊子は主張する。外側は様々に分割されているが、本当は、どこにも割れ目のない一枚板のようなもの。表に見える複雑な区劃は、みんな見せかけにすぎない。

その見せかけの区劃の線をコトバが引く。一枚板の表面に、語の数だけ区劃ができ、それを人はものと呼ぶ。そして語の意味が、ものの「本質」と間違えられる。……。

ところが、と莊子は言うのだ、実は言葉に恒常性などありはしない。だからものと呼ばれる存在区劃にも恒常性はない。「夫れ、道は未だ始めより封あらず。言は未だ始めより常あらず」と。

だが、常識的な人間はそのことを知らない。言語的意味によって「渾敦」の表面に引かれた意味の区劃線を、実在する存在的区劃線だと思いこみ、恒常的な「本質」によって固定されたものの実在をそこに幻想する。

(全集版、p.294)

## 福永光司の「渾沌」観

我々は、莊子における夢と現実の混淆、現実の夢への「渾沌化」に注目すべきであろう。

莊子にとっては、夢も現実も、それを「分有り」とみるのは人間の分別であって、実在の世界では、いわゆる夢も、いわゆる現実も、道—真実在—の一—持続にすぎない。……

莊子は「知らず、周の夢に胡蝶となれるか、胡蝶の夢に周となれるかを」という。「知らず」と答える莊子は、夢と現実の混淆のなかでは、是と非、可と不可、美と醜、大と小、長と短など、あらゆる価値的対立が一つであるばかりでなく、そこでは夢もまた現実であり、人間もまた胡蝶（自然物）である。莊子はこの生きたる渾沌のなかで、与えられた自己の現在を自己の現在として逍遙する。

(福永光司『莊子 内篇』、朝日文庫、pp.136-137。初版は1956年)

## 結び

- 老荘の思想を『楚辞』や屈原と関連させて、シャマニズムという観点からとらえることは、60年代の井筒の著述にすでに見え、そののちも井筒はこの観点を保持したが、これはフランスの漢学者の泰斗、アンリ・マスペロの遺稿に着想を得たものと考えられる。
- 「渾沌」は、福永光司を通じて井筒へと伝えられ、『意識と本質』へと結晶したのではないか。
- 老荘思想の「聖人」観念を、マスペロに遡って、井筒を經由して問い直すことの現代的意義は、なおあると考える。